



ボレロ(モーリス・ラヴェル)
ソナタ/月の光(ベートーヴェン)
交響曲第七番(ベートーヴェン)
前奏曲(フランツ・リスト)
夜想曲(フレデリック・ショパン)
交響曲第一番(ヨハン・ブラームス)

レ・ザン・エ・レ・ゾートル(フランシス・レイ)
パリ・テ・ゾートル(フランシス・レイ)
アン・パルファン・ド・ファン・デュ・モンド(ミシェル・ルグラン)
ボディ・アンド・ソウル・イン・コーポレート(ミシェル・ルグラン)
サラ(ミシェル・ルグラン)
パリ・テ・デキュラス(ジャン・イアンヌ)



製作 ■ 監督 ■ 脚本 クロード・ルルーシュ / 音楽 ■ フランシス・レイ + ミシェル・ルグラン

ジェームス・カーン / ロベール・オッセン / ニコール・ガルシア / ジェラルディン・チャップリン / ジョルジュ・ドン

エブリーヌ・ブイックス / レイモン・ベルグラン / ジャン・クロード・ブリアリ / 日本ヘラルド映画「カラー作品」フランス映画

ドルビーステレオ

DOLBY STEREO
IN SELECTED THEATRES

サントラ盤ワーナー・パイオニア / 原作ヘラルド映画文庫刊

Herald

愛と哀しみのボレロ

東京労音特別鑑賞券発売中! ¥1050(会員に限り)

10月10日 祝ロードショー!

国電有楽町下車

丸の内ピカデリー (201) 2881

伊勢丹会館隣り

新宿ピカデリー (352) 1771

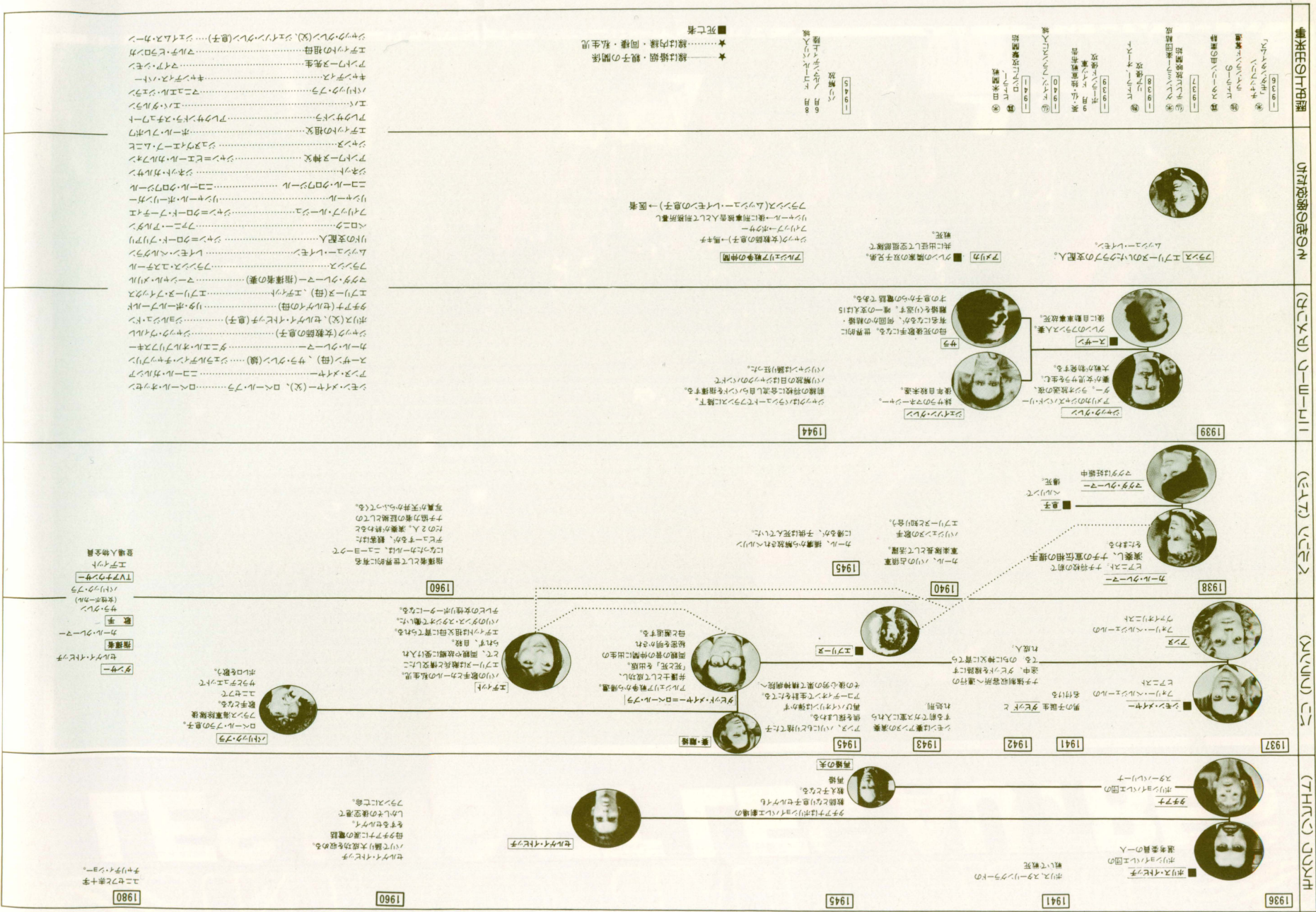
東口 シネマビル5F

吉祥寺セントラル

0422
(48)
6521



LES UNS ET LES AUTRES
UN FILM DE CLAUDE LELOUCH



愛と哀しみのポレロ

UN FILM DE CLAUDE LELOUCH
LES UNS ET LES AUTRES

かいせつ

どんな世界でもそうだが、昨日、新しくなったものは今日、色褪せて見え、今日生き／＼していたものが、明日、疲労の影をわずかに見せたりする。

映画もまたそうだ。昨日、饒舌だったものが、今日寡黙になり、今日、寡黙だったものが、突然、ことばを取り戻す。フランス映画が、ことばと豊かな感情と生き／＼した情熱を取り戻して、私たちの目の前にその雄姿を現わした。「愛と哀しみのポレロ」。クロード・ルルーシュ監督1981年度作品。3時間4分の大型作品。

流れはアメリカ映画からフランス映画へ。ルルーシュ監督、得意の華麗な映像とあふれる音楽で新しい映像の幕開けを高高かに告げる記念碑的作品である。

名づけて、ルルーシュの映像シンフォニー「愛と哀しみのポレロ」。

人生は愛と哀しみの連続だ。どんな人だって愛だけで満ちているとは言えないし、また哀しみだけでもない。愛と哀しみが切れ／＼にやってきて、その人の人生を形成していく。音楽にたとえれば、ラベルのポレロのようだ。四つの国籍の、四つの家族の45年間にわたる、流転と別れとめぐりあいが、音楽と、バレエによって描かれて、観客はこの大河ドラマに身をゆだねながら、このテーマに到達する。それは多分、これまで、誰もが出会うことになかった新しい映像体験であると言っておこう。

1981年、カンヌ国際映画祭に出品、惜しくもグランプリは逃したが、最終日の試写のあと、このエネルギーに満ちた作品に反響は少なかつたことと伝えられる。製作、脚本、監督はクロード・ルルーシュ。彼はこの作品の構想と、準備に5年をかけた撮影は79年の秋から81年の冬まで、約1年4ヶ月をかけた。

音楽構成、音楽監督にミシェル・グラン、フランシス・レイの2人。いうまでもない。フランス映画音楽界を代表する二大巨匠である。出演はロベール・オッセン、ニコール・ガルシア、エブリーヌ・ブイックス、フランシス・ユステール、ジャン・クロード・ブリアリ、マニエル・ジェランなどのフランス勢に、アメリカから、ジェラルディン・チャップリン、ジェームス・カーン、ポーランドからダニエル・オルブリフスキ、さらにブエノス・アイレス生まれの、世界的バレエ・ダンサー、ジョルジュ・ドン、ベルギー生まれのバレエリナ、リタ・ポールブルドなど多彩。四つの国籍の違う人々の話らしくその出演者もまたインタナショナルである。

全体の振り付けは、バレエ界の鬼才と言われて、20世紀バレエ団の主宰者でもあるモリス・ベジャール。彼の振り付けでジョルジュ・ドンが踊るエンディングの、17分間にわたるポレロのシーンは大圧巻。

全体で演奏される曲目、舞踏はリストを参照されたい。



ストーリー

四つの家族の45年間に及ぶストーリーなので、左ページの、世界史年表のような表を覗いただけのがいちばんいいと考えるが、おおまかなストーリーはこうである。

1936年、モスクワ。ポリシヨイ・バレエ団のオーディションで、惜しくも選外となった少女チアナ(リタ・ポールブルド)。その彼女と結婚した選考委員ポリス・イトビッチ(ジョルジュ・ドン)。彼らのあいだの一粒種セルゲイ(J・ドン二役)。彼はやがて国際的バレエダンサーとなる。このダンサーはルドルフ・ヌレエフがモデルと思われる。

1937年、パリ。キャバレー「フォーリー・ベルジェール」の楽団員ピアニストのシモン(ロベール・オッセン)とバイオリニストのアンヌ(ニコール・ガルシア)が結婚。やがてナチのユダヤ人狩りで、シモンは収容所で死亡。生き別れになった息子(オッセン二役)は牧師に育てられ、弁護士として成功する。後、精神病院に入院した母親と再会。

1938年、ベルリン。ナチ高官の前で、ベートーベン「月光」を弾いた、将来性豊かな音楽家カール(ダニエル・オルブリフスキ)。彼はやがて指揮者として大成し、世界的な指揮者となる。

カールは、ヘルベルト・フォン・カラヤンがモデルだと思われる。

1939年、ニューヨーク。陽気なヤンキー、ジャズ・ミュージシャンのジャック・グレン(ジェームス・カーン)。彼は今、ラジオの生放送で、愛妻スーザン(ジェラルディン・チャップリン)に誕生日の祝福のメッセージを述べたところだ。彼もやがてヨーロッパ戦線に参戦。無事帰国すると、戦後、スウィング・ジャズの第一人者となる。

娘サラ(G・チャップリン二役)はジャズボーカリストとして成功し、親子二代にわたってジャズ界の名士となる。このモデルはグレン・ミラーだと思われる。

この他、エディット・ピアフを思わせる、薄幸のシャンソン歌手、エブリーヌ(エブリーヌ・ブイックス)がやはり親子二代で登場する。

これらの音楽家が、それ／＼の人生を、それぞれの場所でする。それらはすべて苛酷な戦争と、辛い戦後を過ごすのである。

そして、それ／＼が、80年のパリ、トロカデロ広場で行なわれるユニセフのチャリティ・コンサートに集うことになる。

踊られるのはラベルのポレロである。

それはまさしく、ベートーベンの第9シンフォニーのテーマのごとく、苦悩を通して歓喜に至るという表現がいちばんふさわしい。

それは、現代という時代を生き延びてきた人々のひとしいテーマと感慨だ。